

令和 7 年度第 1 回廿日市市保健福祉審議会 児童福祉専門部会 会議録（要旨）

◎概要

開催日時	令和 7 年 6 月 1 9 日（木） 1 8 : 3 0 ~ 2 0 : 3 0
開催場所	廿日市市商工保健会館 1 階 多目的ホール
出席委員	西川部会長、山村副部会長、大賀委員、石川委員、眞部委員、松浦委員、宮武委員、空田委員、田畑委員、絹川委員、早川委員、内野委員、谷口委員、堀川委員、平野委員
欠席委員	満井委員
会議内容	1. 開会 2. 子育て担当部長挨拶 3. 委員紹介 4. 部会長及び副部会長の選出 5. 議事 (1) 第 2 期廿日市市子ども・子育て支援事業計画の最終実績について (2) 第 3 期廿日市市子ども・子育て支援事業計画の実施計画について (3) 廿日市市こども計画(仮称)の策定について(概要・課題・スケジュール) 6. 閉会
配付資料	・第 1 回廿日市市保健福祉審議会児童福祉専門部会次第 ・廿日市市保健福祉審議会児童福祉専門部会委員名簿 ・児童福祉専門部会運営規程 ・資料 1 第 2 期廿日市市子ども・子育て支援事業計画数値目標実績一覧表 ・資料 2 第 3 期廿日市市子ども・子育て支援事業計画の実施計画について ・資料 3 - 1 廿日市市こども計画の策定について ・資料 3 - 2 アンケート調査からみる廿日市のこども施策に関する課題 ・資料 3 - 3 こども計画策定スケジュール ・資料 3 - 4 こども計画の計画書イメージ(案)

◎会議内容（要旨）

1. 開会
2. 子育て担当部長挨拶
3. 委員紹介
4. 部会長及び副部会長の選出
5. 議事

（１）第２期廿日市子ども・子育て支援事業計画の最終実績について

事務局	（説明）
委員	留守家庭児童会の達成率が高い小学校については、たくさんこどもが来たということでいいのか。達成率が高いからいいということにはならないと思う。設備や定員、職員の労働条件などは、この数値だけではわからないと思うが、どうか。
事務局	達成率は、目標としていた定員に対して、どれだけ確保できたかを表しており、定員数は公立の児童会と民間児童会をあわせた数値となっている。おっしゃるように、労働環境やこどもの過ごす部屋の環境整備が課題となっており、今後はそういった部分にも力を入れていきたいと考えている。
部会長	第３期子ども・子育て支援事業計画の２１ページに、第２期の成果として、子育て家庭の転入が多かったと書いてある。そうなると必然的に留守家庭児童会の利用者は増えるため、定員の確保や環境整備は第３期計画でも引き続き重要となってくる。 第１期では乳児家庭全戸訪問はしっかりやっていた印象だが、第２期で目標が達成できていないのは、やはりコロナの影響か。
事務局	おっしゃるとおり、コロナ禍で対面での訪問を自粛する傾向があり、実施割合が低くなっている。
部会長	第３期は回復する見込みがあると感じた。資料１の２ページにある、「将来の夢や目標を持っている児童・生徒の割合」や「地域力で子育てを支える」の部分で達成が難しかったと言われていたので、必然的にそれがこども計画の重要な部分となってくると思う。３つ目の議題になってくると思うが、事務局として意見があればお願いしたい。
事務局	後ほど説明させてもらうが、第３期計画は第２期計画を踏まえて策定した。今年度策定するこども計画においてもこれまでの課題を踏まえて策定していきたいと考えている。
部会長	今年度からこどもの居場所に関する委員の皆様に参加していただいている。居場所などに力を入れていきたいという背景があり、そういう人選となっている。こども計画に向けて、是非、知恵を貸してほしい。

委員	1 ページ目の病児保育について、達成率が70%程度だが、保育園側の認識としては、定員が少なく、預けたくても預けられない。どのような目標設定となっているのか。
事務局	利用定員は1日4名で、病院の年間開院日数をかけて、最大受入人数が目標数値となっていた。達成率が低いのは、コロナ禍もあり、利用したいが利用を控えた人も多かったのではないかと考えている。

(2) 第3期廿日市子ども・子育て支援事業計画の実施計画について

事務局	(説明)
委員	計画を作られている関係者の方々と末端の方々とで認知度にギャップがある。サービスとしては充実してるが、そういうサービスがあることすら知らない人がたくさんいる。まず、認知をしてもらうことが大切である。例えば、こどもや子育て世帯向けのイベントを実施することにあわせて、こども会議のようなものを開催したり、メディアを使って宣伝していった方がよい。市外にしっかり打ち出してもらえると、私たちも打ち出しやすい。広島市ではなく、廿日市市を選んで住んでもらいたい。 児童会を運営していて感じるのは小一の壁である。1年生の最初は楽しいが6月ぐらいから授業が始まり、字が読める子と読めない子で差ができる。授業が楽しくない、お腹がいたい、学校に行きたくないといったことに繋がる。保育園の年長の時に、ある程度、教えた方がいいのではないかと感じている。児童会を運営するまで気付かなかったが、実際に困っているこどもがいる。逃げ場所として、いろんな場所を作るのも必要かもしれないが、学校に行ける支援も必要だと感じている。運営している児童会では、音読したりとかしながら、少しでも前向きになれるように取り組んでいる。 計画書にはこのことが書かれていてカバーされているが、それがいろいろな取組と連動して、みんなに分かってもらって、使ってもらおうという仕組みづくりが大切である。計画は十分だが、それがリーチしていない。廿日市市は広島市と比べて、小回りが利くまちである。もっと良くなっていくと思う。
部会長	計画そのものはいいけども、これをどうやって伝えるか、またどうやって利用するかっていうところが課題なのではないかということをお願いした。保護者の方もいらっしゃるんで、実際、情報をどのように入手しているかなどをありのまま教えていただきたいが、どうか。
委員	保育園などでも紙面で情報をもらうことが多い。目は通すが、捨ててしまうことも多い。こどもが楽しめる施設などで、こういう取組があると教えてもらえるといいかもしれない。おむつのプレゼントがあるのも初めて聞いた。例えば、産院などで紹介されたら、利用してみたいと思うかもしれない。
委員	その時必要な情報というのが見つけにくいと感じる。支援センターな

	どで掲示されているものを見たときに、こういう制度があるのだと気づくことはあるが、日々のルーティン化された生活の中で得られる情報は限られている。そういう状況の中で、必要とされている情報を子育て家庭に提供していくのは非常に難しいと感じたが、隙間時間にSNSを使う保護者は多いので、そこをうまく活用していくのは重要だと感じた。
部会長	SNSの活用だったり、必要とする人の動線に入るように発信することが重要だと思う。口コミも大きい。広報について何か事務局で、思いや意見はあるか。
事務局	資料2の2ページの中段にあるように、今年の9月を目途に子育ての情報を一元化するサイトの構築を目指している。そのサイトにどのように導いていくかがポイントだと思っている。各委員が言われたように、ターゲットである子育て世代が集まるタッチポイントに、どういった周知のチラシなどをおくか、SNSを活用しながら、どのように情報展開していくかということが重要だと考えている。あわせて、保育施設などの各施設も子育て世代が集まるタッチポイントなので、協力を得ながら情報を周知したい。 また、廿日市市では市長の記者発表という場を設定しており、事業を展開していくときにはメディアプロモーションも活用してやっていきたい。引き続き皆様のご協力をお願いしたい。
部会長	9月に完成するということだが、是非、委員の皆様には使っていただきたい。分かりにくいとか、言葉が難しいとか、視覚支援がなくてイメージがわからないといった率直な意見を事務局に伝えてほしい。使いやすさが大切である。また、サイトの周知についてもご協力をお願いしたい。

(3) 廿日市市子ども計画（仮称）の策定について（概要・課題・スケジュール）

事務局	(説明)
委員	資料3-2についてだが、他市と比べて廿日市市の課題や特徴はあるか。
事務局 (委託業者)	アンケートなどの資料を見ながら思ったのは、子育ての満足度は非常に高い一方で、こどもが意見を言いにくいと思う割合が高いことが特徴的だと感じている。子育て支援を充実させてきたため、保護者の満足度は高いが、こどもにとって過ごしやすいまちにしていく必要があると思う。今回は策定段階としてこどもミーティングもあるため、そういった機会も活用してこどもの意見を把握していきたい。
委員	こどもたちが意見が出しやすい自治体の特徴などはあるのか。
部会長	都市部と山間地の違いなどは考えられるか。
事務局 (委託業者)	どちらかという山間地や地方の方が意見の出しやすい環境にあると思われるが、それは、意見の言いやすさの違いというよりかは、こども自身が抱える悩みや伝えたいことが都市部や山間地によって違うということにあると思われる。置かれている環境でこどもの悩みは変わり、その悩みの種類によって、言いやすさ・言いにくさが変わるのだと思う。

部会長	だいたいの傾向は全国同じだと思われる。第２期計画で一番気になっていたのは、将来の夢をや目標をもっている児童・生徒の割合が５年前と比べて下がっており、あまりよろしくない傾向である。計画としては、子育て世代の転入者が増えるなど成功しているが、こどもたちの状況が向上しているとは見られない。ここを上げていくことにこども計画の意義があると思う。子ども・子育て支援事業計画は、小学生や中学生ぐらいまでのこどもを中心とした計画であったが、こども計画は２９歳までの計画となる。私は、経済的なサポートよりも就労支援や働ける場所があることが大切だと思っている。委員の皆様には、２９歳までの若者たちに向けて、廿日市は何が足りないのか、若者は何に困っているのか、感じられていることをお話しいただきたい。
委員	１８歳から２２歳までの大学生の集団を見ている。資料３－２を見て、こどもの権利条約のことはきっと小学生のころから授業で習っているはずなのに、アンケートでは知らないと答えてしまうのは言葉の使い方なのかなと思っている。おそらく、こどもが意見を言う権利があるのは知っていて、意見を持っているが、みんなの前では言えない・言いたくないというのが最近の若者の特性だと思う。目立つのも嫌だが、目立たないのも嫌で、常に人の目を気にしながら中間層でいたいと考えている。意見をウェブで求めるとたくさん書けるが、誰かに発表してもらおうと思うと喋らない。でも、マイクを渡すと喋る。高校生までは授業でディベートやディスカッションを経験し、意見をどのように言ったらいいのかということを訓練していても、大学生になると自分の意見を人前で言えなくなる。おそらく全国的にそうなのだと思う。今回、計画の対象に若者も入り、若者の意見を言う機会をまずはたくさん作るということとはとても大事だと思う。
委員	昔、廿日市市は産業のまちだったが、今は働くところが少ない。金剛寺小学校区では二十歳のお祝いを自治会でやるが、大学生は県外が多く、就職している子も廿日市の子はいなかった。産業を大切にしたら違ってくると思う。 若者にもいろいろな困難を抱えた方がいる。中学生の頃から不登校となり、今はひきこもりとなっている２０歳の子の母親が、どうしても就労させて、社会と関わりを持たせたいと思って、知り合いに頼みこんで、できる仕事を探していた。また、昔、主任児童委員として、４か月健診で関わったこどもが今は１７歳になっているが、早い段階で発達障がいがあることが分かって、母親はいろんな困難をぶつかりながらも一生懸命育てられているが、今も苦労が絶えない様子をみている。
委員	小学校では自分のことが好きになるような取組を低学年から行っている。発達段階に応じて役割を与え、達成させることで自信をもたせながら、自分を好きになる取組を進めているが、こどもの中にはすごく高い目標をもっていて、こちらがいいと思っても満足できず、達成感を得られにくいこどももいる。学校では、いろいろな意見を出し合い、

	自分と違う意見も受け入れながら新しい価値を作っていく協働的な学びを進めている。人にはいろいろな生き方があり、大人になってもいろいろな生き方に会おうと思う。答えはひとつではなく、いろいろあるということを教えていきたい。
委員	児童会ではどんなに人付き合いが苦手な子でも、友達と一緒に遊びたがる。大人も同じで、同じような価値観をもった仲間がほしいんだと思う。関わることによって、安心感であったり、自分のことを正しいと思えたりするのかなと感じている。いろいろな人たちと接することによって大人もこどもも心の部分が満たされる。廿日市市はコンパクトなまちなので、それを機能的に作ることができるのではないかなと思う。 また、積極的に物事を解決しようと思って頭を働かせることが出来る人としめない人がいるが、自分が客観的に見るかぎりでは、出来る人の方が楽しんで生活していて、しない人は人のせいにしがちである。自分で考える力をどうやったらこどもは身につけることができるのかということ最近考えている。
委員	どう振る舞っていいかわからない子が増えたように思う。こどもが包丁を持って親を脅すという話を立て続けに聞いた。相談に行った方がいいという話をしたが、事の重大さが分かっていないようであった。どうこどもに伝えていくか、子を育てる本質を分かっていない親もいて、心配である。
委員	放課後の居場所づくりに取り組んでいる。こどもたちが活発に遊びまわる居場所がたくさんあるといいと思う。他の委員の話をきいて、いろいろな状況のこどもがいると感じた。
委員	長いこと教員をやっている。就職先があることももちろん大切であるが、やはり廿日市が好きで廿日市に住みたい・働きたいと思うこどもをどれだけ増やせるかというのが大事だと考えている。現場も頑張るので、それを後押ししてくれるようなこども計画となったらいいと思う。
委員	中山間地域の全園児32人の小さな保育園に勤めている。保育園だけでなく、小学校も中学校も人数が少なくなっている。中学生も参加する地域の会議の中で、大人に望むことを聞くと部活がしたいと言っていた。野球がしたいけど人数が少なくできないため、少し下の中学校まで行ったりするそうである。また、中学3年生の子であったが、自分たちは野外活動ができなかったが、1年生にはしてあげたいと言っていた。中山間地域のこどもたちの声もたくさんひろってあげてほしい。こども若者ミーティングだけでなく、学校ぐるみで話を聞いてあげてほしいと感じた。
委員	20代の時に部活の外部講師をやっていた。授業になじめない子やいろいろな課題を抱えている子が部活動なら頑張れるというのをたくさん見てきた。部活動が居場所となっていたり、部活動で自分のいいところを発揮できて、それが就職や大学に結びついたり、地元に戻ってきて教員となってまた部活動に関わったりという循環の中で育ってきたと

	いう実感がある。現場の教員やこどもの数など、いろいろな事情があることもわかっているが、地域移行することによって、循環が断ち切れ、部活動の質が下がっていくのではないかという懸念の声を聞く。貧困の話もあったかと思うが、例えば、高価な楽器に触れたり、野球などのスポーツを学外でと言われると難しいこどもはたくさんいる。地域移行となっても、ある程度の環境の中で自分を発揮できる場をなくさないで欲しい。先ほどの話にもあったが、こどもにとって部活動は大きなウェイトを占めていて、そういうところを求めている。全体の問題からすると小さく扱われてしまっているが、こどもの声は軽んじない方がいいと思う。廿日市市だからこそ、部活動やこどもの居場所について考えてほしいと感じている。
委員	部活動の地域移行に関わっているが、場所の問題が一番あると思う。例えば、吹奏楽であれば楽器の管理や置き場などの問題をクリアしていく必要がある。この場では違う話をするが、地域移行の関係で中学校の部活動の様子を見させてもらう中で、あれっと思うことがある。就学前の時には自己の意見ややりたいことをよく言っているこどもが、中学校では受け身の子が多かった。もちろん自己主張ができたり、自己肯定感が高いこどももいると思うし、このアンケート結果が全てではないと思う。幼少期の時にあるものを年を重ねることによってどのように結びつけて、どのように社会に貢献していくかを考える必要がある。一例でしかないが、北欧では、小学校の頃からフィロソフィーを学ぶ時間が多い。日本の道徳とは異なり、フィロソフィーを通して、社会に向けての発信の仕方であったり、政治だったり絶えず学んでいる。その経験を積んでいくので、大人になった時にいろいろなことに関心が向く。例えば、選挙権を持ったときには投票率が高い。日本は、関心が自分のこと中心になっていることに、我々大人が自覚しないとイケない。こどもには周りを見渡せる子であってほしいと感じた。
委員	自己肯定感という話が出たが、幼児期は自己表現したり、褒められる経験をたくさんするが、小学校ではみんなと同じようにしないとイケないというルールができて、つまりく子が多い。幼児期までの環境の違いにこどもはギャップを感じる。校則などのルールは必要な部分もあると思うが、自己表現することが良くないとされることが結構あると感じる。それだと自己表現できない。学校でもこどもの表現を尊重してもらいたい。
委員	みなさんが話されている内容とは少し異なるが、何が足りてないだろうか考えた時に家庭内でこどもと接する時間が足りないと思った。我が家は共働きで、妻もフルタイムで働いているが、朝起きて、こどもを送って、仕事行って、昨年とかは遅い時間まで働いていた。平日にこどもと接する時間が足りていなかったと今になってとても感じる。でも働かないとイケない。親に余裕がない。こどもに関われる時間が限りなく少なくなっているが、しっかりと関わらないとイケないという焦りみた

	いなものもある。それが、こどもに何かしら影響があるのではないかと感じる。行政で何かできることではないかもしれないが、各家庭がこどもと接する時間及び質を高める環境を築いていくということが今後必要なのではないかと感じた。
委員	若者になっても戻ってこれる・住み続けられるということについて、障がい分野の立場からいうと、安心して過ごせる場所があるか、地域に障がい特性を理解してもらえているか、保護者だけでなく一緒に考えてもらえる場所があるか、仕事や役割など自分の力を発揮できる場所があるかといったことが大切だと思う。認められるということが自己肯定感や自己効力感に繋がっていくので、行政とも一緒に考えながら、そういう場所が増えて、誰もが住みやすい廿日市になったらいいと思う。
委員	こどもの権利とずっと言われてきているが、こどもが意見を言えないというのは現状の結果だと思う。自分の意見を言うことができない状況にあった世代が親になって、人に迷惑をかけないようにと教えることが多かったなと自分を振り返りながら思う。家庭だけでは難しいので、意見を表現できるように、保育園や小学校など途切れなく訓練できる場があればよいと思う。また、夢が持てないというのは、体験の場所が少ないからだと感じており、体験活動ができる場所が増えたらいいと思う。ひきこもりについても、不登校かからひきこもりになっていくと思うので、こども相談室などがもっと活用されるようになってほしい。 こども計画の策定に向けて、現場として何ができるか考えていきたい。
部会長	日本の少子化問題は１９９０年頃から言われ始めた。子ども・子育て支援事業計画は第３期となるが、ここまで続いているのは地域のカスタマイズにより効果が出ているからである。 次の会議では、こんな政策はどうかといったアドバイスをいただきたい。受け身ではなく、主体的に策定に関わっていただきたい。

6. 閉会